

# JAFFE のあゆみ

## JAFFE 設立の経緯と課題

久場嬉子（「フェミニスト経済学日本フォーラム」元代表／  
東京学芸大学名誉教授）

### I. JAFFE の“立ち上げ”

#### 1.1 経緯——「日本フォーラム」から JAFFE へ

「日本フェミニスト経済学会」（Japan Association for Feminist Economics=JAFFE）は、2004年4月、前身である「フェミニスト経済学日本フォーラム」を開き、62人の会員登録をもって発足した。「フォーラム」の設立と課題について論じ合う「設立記念シンポジウム：“経済学をジェンダー化する”」は、多くの熱心な参加者を得て開催された（法政大学市ヶ谷キャンパス、ボアソナード・タワーにて）。その後「日本フォーラム」は、研究活動を活発化させ、内外における交流を強化・拡大させていくため「日本フェミニスト経済学会」に名称・組織を改変している。

日本においては、1970年代以降、人文科学や社会科学の領域におけるフェミニズム・ジェンダー視点からの諸研究は発展してきたものの、経済学や経済諸問題との関連を問う取り組みは遅れていた。しかし、数十年以上におよぶ内外の経済と社会の激動は、経済学（領域）に大きなインパクトを与えており、経済学が取り扱う課題や方法、また目的とその内容について、フェミニズム・ジェンダー視点からする新しい把握と根本的な「問い直し」が要請されるようになった。JAFFEの設立は、広くこれらの問題への取り組みをはじめめることを課題としている。

それらの推進のために、「研究者、政策立案者、さらに活動家たちの幅広い経験と活動の交流」をすすめる、かつ、「経済学以外の諸分野における成果から学びつつ、専門領域を超えて学際的に、課題の究明に取り組むこと」、さらに、「IAFFE（国際フェミニスト経済学会）」などの国際的な研究動向を把握・共有することを目指す」としている。（学会ホームページ、JAFFE「設立趣意書」）

#### 1.2 フェミニスト経済学日本フォーラム

##### 「設立記念シンポジウム：経済学をジェンダー化する」

2004年4月17日 於：法政大学市ヶ谷キャンパス、ボアソナードタワー

JAFFEの立ち上げにあたり、経済学におけるフェミニスト・ジェンダー視点からする「フェミニスト経済分析」をめぐる、当面している新しい課題とは何かを討議するシンポジウムが開催された。提起され、示唆された課題の多くは、その後のJAFFE大会のテーマとなっている。

- ・司会：村松 安子
- ・報告者：【所属は当時・記載順】

山森 亮（東京都立大学）  
「フェミニスト経済学とA, センの議論をめぐる覚書」

- 1.1 相互依存性の把握      1.2 行為主体      1.3 必要
- 1.4 家系内の分配：協力的対立      2 セン for ジェンダー
- 3 ジェンダー for セン

居城 瞬子（常葉学園大学）

「女性の仕事の「価値」、平等賃金、生活賃金」

- 1 はじめに      2 同一価値労働同一賃金思想の発展と職務評価
- 3 生活賃金運動における家族賃金概念の変化      4 まとめにかえて

久場 嬉子（龍谷大学）

「経済学批判の盲点——アンペイドワーク論の射程」

- 1 はじめに      2 “アンペイドワーク（無償労働）の発見”
- 3 “見えざる労働” から “見える労働” へ——90年代における射程の拡大
- 4 経済学のジェンダー化に向けて

村松 安子（東京女子大学）

「マクロ経済学のジェンダー化とジェンダー予算——開発に見られる非対称性への挑戦」

- 1 はじめに      2 ミクロからメゾ／マクロ・レベルのジェンダー分析へ
- 3 ジェンダー予算という方法

足立 真理子（大阪女子大学）

「グローバル資本主義＝グローバリゼーションへのフェミニスト政治経済学分析の方法」

- 1. 方法：グローバル資本主義＝グローバリゼーションのフェミニスト政治経済分析
- 2. グローバル資本主義＝グローバリゼーションの進展過程（三つの局面）
- 3. グローバル資本主義の再定義化：再生産領域のグローバリゼーション

・コメント：【所属は当時】

原 伸子（法政大学）、藤原 千沙（岩手大学）、古沢 希代子（恵泉女学園大学）

・記録 松川誠一（東京学芸大学）

## Ⅱ. IAFFE（国際フェミニスト経済学会）によるインパクトー 国際的背景

### 2.1 IAFFE の設立

JAFFE の“立ち上げ”に大きなインパクトを与えた「国際フェミニスト経済学会」(International Association for Feminist Economics = IAFFE) は、JAFFE の立ち上げよりすでに 10 年以上も早く、1992 年にワシントン DC のアメリカン大学において設立されている。‘きっかけ’となったのは、1990 年、ワシントン DC で開催された「アメリカ経済学会」年次大会の 1 セッションにおける D. ストラスマンの呼びかけであり、それは、「フェミニズムは経済学に居場所をみつけることができるか」と題されていた。

IAFFE 設立後、1995 年には IAFFE の学会誌である *Feminist Economics* の刊行が始まっている。(年に 3 回。編集長は D. ストラスマン。毎号ごとに多くの研究者がゲスト・エディターとして編集に参加している。) 1994 年度の「アメリカ経済学会」の会長をつとめ、1998 度のノーベル経済学賞を授賞した A. センは、IAFFE の立ち上げ時からのメンバーであり、*Feminist Economics* の刊行にはその編集に加わっている。IAFFE は多くの男性会員を擁している。

ジャーナルの創刊号は、「フェミニスト・エコノミック研究のためのフォーラムを創る」と題する編集者の「論説」(ジャーナル編集の基本方針)が掲載されているが、その要点は次のとおりである。( *Feminist Economics* Vol. 1, 1-5, 1995)

- ① フェミニズムについて、「一つの定義をもとめない」し、「経済学にいま存在しているフェミニズムの多様性を歓迎する。」  
(註) 1970 年以降、欧米のフェミニズムは、リベラル、ラディカル、マルクス主義フェミニズムの三つに大別される。IAFFE は、これらの「経済学にいま存在しているフェミニズムの多様性」を「前提」にし、考え方に関しては「連合体」をつくっている。
- ② *Feminist Economics* の目的は、「フェミニストによる経済学の再概念化」をはかることにある。「経済理論や経済学についての方法論的理解に関する洞察的な再構成」を、「受容されている経済理論についての真剣な批判」と「重要な政策に関する鋭敏な分析」、「時局的なテーマや公共政策に関する討論をすすめる」。「思想史、経済(学)方法論および経済教育の分野を重視」する。
- ③ フェミニストは、「西欧の生活や見方の普遍性という絶対的な前提の上に結論づけられている主流派経済学の……理論的殿堂を、それは世界中の女性、男性、子どもの生活と生産的貢献を無視する殿堂であり疑問視」する。
- ④ *Feminist Economics* は、「変化のための触媒となることができる」  
「変化のための‘触媒’」とは、既存の経済学(主流派経済学)にフェミニズムの視点を「持ち込む」、あるいはそれによって主流派のパラダイムを「拡大することではなく、フェミニズムによって主流派経済学のパラダイムそのものを「変えていく」ことである。

北米で生まれた IAFFE は、1990 年代を通してその活動をヨーロッパへと拡大させ、21 世紀には、欧米のみならずアジア、アフリカを含み研究・交流・情報活動を活発化させている。2017 年度の IAFFE 年次大会(26th IAFFE Annual Conference)は、韓国・ソウルで開かれた。タイ(2007 年)、中国(2011 年)に次ぐアジアで 3 度目の開催であり、大会テーマは「多極世界におけるジェンダー不平等」である。2016 年に IAFFE は、日本を含む 66 カ国の会員で構成されている。

## 2.2 IAFFE —フェミニスト／ジェンダー視点からする経済学、経済・社会政策、経済・社会諸問題への「問い直し」へ

現在、フェミニスト／ジェンダー視点からする経済学と経済・社会諸問題についての考察は、現行

のそれをいわば「一新」するものとなっている。

L. ベネリア (2003 ~ 2004 年、IAFFE 代表) は、経済活動の概念化をめぐる、市場での生産活動だけでなく、「社会的再生産や労働力の維持に貢献し、市場に直接結びつかないすべての労働」をも含めて把握する必要があると強調した。全労働 (有償と無償) の視点やその把握は、市場経済の問題としてだけでなく、社会福祉や「人的資源」の「社会的再生産」に関わる労働として把握し、評価しなくてはならない。

D. エルソンもまた、女性の経済活動が従来の伝統的な経済学的範疇 (生産的労働対非生産的労働として対比される) のように明確に区別されない“仕事領域”にわたっていることに注目する。女性は人間の生活の基本的ニーズを満たす労働に多く従事している。なにより大切なことは、人間の労働力は「日々、かつ世代的に再生産」されなくてはならないこと、にも関わらず、これらの労働は社会的、経済的に正当に評価されていないと批判している (1994; 2004)。

「全労働」をめぐる考察は、1990 年代の IAFFE の設立と北京世界女性会議前後の、そして同時進行してきた経済のグローバル化とサービス経済化の、さらに正統派経済学 (orthodoxeconomics) の「強化」のなかで「フェミニストによる経済学の‘再概念化’」(D. ストラスマン) のテーマとして取り上げられている。「理論化」、「具体的な政策化」、「現状分析」、また、「概念化をめぐる方法論的考察」の問題として、「資本制生産と労働力 (人間) の社会的再生産」の分析が、フェミニスト経済学の取り組む最大の、新しい「喫緊の課題」となっている。